

九 海辺の老夫、小説を読む

蝶と呼ばれる老夫は、虚勢を張って人並みに書物を読みたいと思っている。ところが、読みの速度が遅いので読む書物の数は限られる。とくに小説を手にすることが少ない。関心がさまざまなことに向かってこの傾向は改まらず、秋が深まるというのに今年になって読んだ小説はまだない。さすがにあじけないと考えて思い立った。現代小説とりわけ日本のものを読まなくてはいけないが、一つを選ぶとしたら慎重でなければならぬ。評判のベストセラーというのが少しひっかかるが、最も縁のなかつた村上春樹に決める。数多い作品のうちの何にするか。今世紀になってからの五十代の作品『海辺のカフカ』にした。表題の「海辺」が、海辺に住む者にふさわしいだろう。それに、「カフカ」というのも意味深長だ。こうして、老夫はめつたに読まない小説を読むことになった。

さて、都会に出たおりに久しぶりに書店で買ったとき初めて、この人がF・カフカ賞を受賞したということを知るかつかさである。とにかく、たいへんな数の人々がほめあげる作品を自分なりに読んでみよう。付和雷同するのはきらいだから、少し構えて読む。

読み始めてすぐ、単語と一つ一つの文が平明だと知る。とても読みやすい。最初の一章と二章で、文体を変えてかけ離れた物語を始めるという工夫がなされている。それが予想させるように、三章と四章で、全体の物語が二重奏で語られることが確認される。「僕」が語る奇数章が主題を紡ぎ、偶数章は好奇心をくすぐりながら不条理を伴奏する。そのうち、一方が現在形の文で他方は過去形の文でつづられていることに気づく。やがて、両方に出る言葉がしだいにかすかな関連を暗示して、奇数章と偶数章がからまってくることを期待させる。語りはとても巧みだ、と思う。平明な文章が、思いつめた感情や、とほけていてしかも奥行きある意味など、さまざまに複雑な内容をそれらにふさわしく的確に記述する。そういう文章が次々になめらかに繰り返される。しかし軽すぎることはない。

文章が翻訳文の色彩を帯びていることが老夫にも見てとれる。日本人が普通使わないような組み合わせの言葉で文が構成される。典型的になりがちな文に、思いがけない形容動詞や副詞などがくつついている。作者は新しい文体をつくり出すために、意識してそういう言葉を紡ぎ出すのだろう。あるいは、少年の頃から世界文学全集を一通り読んだという人は、文章を書くとき半ば自然にそういうことができるのだ。それは、二十世紀後半に日本語が変化してきたことも関係しているだろう。戦後に日本語を読み書きして成長した日本人は、翻訳調の文章を意識できないほどになってきた。だから、多くの人々が違和感

をもたず、かえって新鮮に感じながらこういう文章を読むことができる。

文庫本では少しむつかしい漢字にルビがふつてある。読者のためのサービス精神は、作品自体にあふれている。たとえば、偶数章の主人公ナカタさんと伴走者星野さんとのかけあいは、伝来の落語や漫才を聴くようだ。星野青年が柄にもなく「知事さんは資本家の犬」というような言葉を口にする、「労働者諸君」と呼びかける車寅次郎を想い出す。ここには、映画や漫画などの影響もあるのだろう。実際、映画インディ・ジョーンズのような冒険物語をなぞり、象徴的な物体として石が登場する。登りつめた状態からの出口を探す一九七〇年代以後の先進諸国は、なんでもありの時代なのだ。少年の猫殺しが限度を失うことにまで行きつく現実社会がある。すでにあらゆることが文学の世界で試されている。現代小説は、現実に起きているだろうどんなことも、昔の作家ならためらったであろうことまで、ものおしせず書くようになった。新しい小説がさらに斬新な記述を追求するのは当然の流れだ。そしてこの小説は、そういうすべてを實にてぎわよく語る表現力をもつ。現代人はおのずとそれに引きこまれていく。

外国と日本の文学を広く読みこんでいる作家は、それらの道具立てや手法などをみな取りこむ。この小説の筋書きは、ギリシア悲劇『オイディプス』と同じものだ。欧米人にな

じみの運命的で精神分析的なテーマを、遠い異国の現代日本を舞台に、幻想小説に仕立ててみせようというのである。おもしろいのは、そういうことを語りの中で明かして、読者を親切に導いていく点だ。生き霊が出るころでは古代の『源氏物語』の事例で種明かしし、幻想小説として江戸時代の『雨月物語』の名も引く。幻想の森の中で目じるしを示される読者はそこで迷うことがない。

だからといって、この小説が決して軽すぎることはない。古今東西の文学を溶けこませた長い物語が、魅力的な文体で進行する。透明な文章がつづられる中に、自然や世界についてたいへん深い省察が現われて、読者はさまざま思索に誘われる。地の文章だけではなく、十五歳の少年と相手は驚くほど知的な会話を交わし、機智にあふれたやりとりをする。ずいぶん気をつけて読まなければ見のがしてしまうほど。文学の知識が披露され、音楽についてもいろいろ教えられる。幻想小説はまた教養小説でもあるのだ。とても盛りだくさんな小説である。作者が並々ならない知識と力量の持ち主だということを知る。

ただ、オイティプスの悲劇を歩む少年の運命の記述が十分緊密ではないと感じた。悲劇的な運命は初めから明かされていて、出来すぎなほど事が運び、それにまつわる記述があるだけだ。運命的な出来事は事後に運命だと悟られて、運命を選びとった当事者にはそれ

が必然だったと思われるのである。その事態についての記述は希薄だから、「僕」になりきって運命を感じる事ができない。「僕」の情動を十分には体験できない。それは幻想小説という形式からくる限界なのだろう。ともかく、これはたいへんロマンティックな小説だ。心情を通わず情景の描写は美しく、いなかの老夫さえ捉えてうっとりさせる。数多い読者はこの魅力のとりこにされるのだろう。蛇足だが、幻想が終わって、生きる希望が生まれた少年についての最後の数ページはやや平凡で、夢から覚めたような幻滅を感じた。幻想小説は、終わらせ方がむつかしい。

幻想あるいは冒険の物語は、その社会の問題と無縁なのではない。そもそもこの物語は、客観的に見れば、資本主義経済が地球全体に及んで飽和した社会が出口を探している状況の中で紡がれているのである。文中のはしばしに多くの問題を示唆する言葉が現われ、庶民の生活の一端が語られ、戦争や社会福祉にまで思いを致すヒントが埋めこまれている。しかし、それらはむしろあつさりとは触れられるだけだ。ほとんど著者自身でもあるF・カフカの描く人物のように、人間と社会の不条理に耐えかねている、とまではみえない。健康でタフな少年カフカに代わって、作者がそれをどれだけ引き受けるつもりなのかもよくわからない。運命あるいは深層心理というメタファーのおおう暗闇をくぐり抜けて出る、

青春物語と解釈することもできそうだ。

衣食に関するカタカナ言葉で老夫の知らないものがあり、身のまわりの品々に對する愛好がほの見える。自動車についての関心もあるようだ。「僕」は大きな家で不自由なく育つたようだし、知的な会話を交わす佐伯さんも大島さんも庶民の乗らない自動車に乗っている。こういう描き方は、中産階級以上のヨーロッパの作家たちによる描写に影響されているのかもしれないが、それらの趣味は、高度経済成長を遂げていった日本の都会で成長した人に身についたことなのだろう。これらの登場人物たちは、クラシック音楽だけではなく外国のポピュラー・ミュージックにも親しんでいる。この小説の読者は、それぞれにいくぶんかずつ体験したことを親密に感じながら味わうのだ。外国の読者にとっても、日本のほかの小説よりも理解しやすく親しみやすいだろう。

全体として見ればこの小説は、よく考えて構想し、配置と展開をあらかじめ十分に設計してつくられた創作物だと思う。しかも実際に展開するときには言葉があふれ出て、そのなめらかな語りが細部まで豊かな物語を形づくる。文章の透明さにつなげて表現すれば、きわめて多数のガラスを複雑に組み立てた精巧な工芸的作品といえる。ガラスの部品は色とりどりでなお透明さをたたえている。構えて読んだせいで、弱点を見出そうとする書き

ぶりになってしまったが、名作に備わるべき要素はみな含まれていると思う。

構えていながら引きこまれて、十分に楽しんだわたしは、この小説から何を得ただろうか。何事も断定する力のない者には答えることができない。名作は教訓を与えない。ただ没入して味わうものだ。それは、『源氏物語』の昔から決まっていることである。わたしはたしかに興味深く味わった。ところで、J・ジョイスの短編集『ダブリンの市民』の解説で、文芸批評家がそれぞれの短編からどれほど多くの意味を引き出すことができるかにあきれた経験がある。だから、このような感想をつづっても何の用もなさないことを知っている。けれども、才知のない者にはこういうことしかできなかった。

物語から解き放たれた老人は、自分の生きた時代にもっとさまざまな可能的なあり方がありえたのだ、とあらためて思う。しかし、それで大きく心を乱されることがないほど歳をとっている。秋の夕暮れ、対岸の小さな漁村を夕陽が明るく照らす。その岸まで迫る山々は特別姿がいいわけではなく、こちらの海岸もどこにでもあるありふれた風景だ。都の知識人が花も紅葉もないさびしい風景を歌に詠んだとき、そこに暮らす人間は念頭になかったのだが、その海辺に、はかない蝶のような老夫が自然の一部となつてたはず。

二〇一三年晚秋